

令和8年

冬

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2026
Vol.
137

七宗町

飛騨川の流れが
生み出す自然の美

飛水峡

地域の歴史

御神木を伐り出した七宗山と里山の暮らし

地域の治水・利水

ホタル舞う神湊川流域と明治四十三年の大洪水

歴史記録

大阪から開始した近代工法 第二編
淀川の粗朶沈床

研究資料

尾張平野の川と戦国のまち
京都大学大学院人間・環境学研究科
教授 山村亜希

8

5

3

1

御神木を伐り出した七宗山と 里山の暮らし



室兼林道を行く森林鉄道＜出典：林野庁ホームページ「森林鉄道」＞

昭和三十（一九五五）年、加茂郡上麻生村と武儀郡神淵村が合併して、七宗町ができました（当時は七宗村。翌年さらに中麻生地区が編入。町制施行は昭和四十六年）。町名の「七宗（ひちそう）」は、両村の東北部に位置する七宗山から取られました。七宗山は飛騨川・神淵川・菅田川の三川に囲まれた山で、中に七つの高い峰があり、七宗山という名もこの七高峰が連なることから起こったそうです。江戸時代、七宗山の麓を取り巻く上麻生・神淵・菅田・金山（現・下呂市）、坂之東（現・白川町）の村々は「七宗根廻りの村」と呼ばれていました。

江戸時代の七宗山は尾張藩の御林山で、名古屋に近く運材の便が良かったため「尾張様の御納戸」と呼ばれ保護されました。明治時代、帝室御料林となり、戦後は七宗国有林となりました。七宗町の面積の九割以上を森林が占め、地域の人々は古来、山や森林と密接な関わりを持って暮らしてきました。

一 江戸時代の七宗山

元和元（一六一五）年、尾張徳川家初代義直が、家康から七宗山・木曾山を与えられました。そして元禄五（一六九二）年、上麻生村の百姓次郎右衛門が山廻りの役職を命ぜられます。やがて役名が山守と改められ、次郎右衛門は多々羅姓を名乗り、柿ヶ野に番所を構えました。山守の配下には山廻りがおり、山内の巡視、作業の指揮監督・現場事務等に従事しました。

七宗山で伐られた木材は、一本ずつ谷川を流して下らせ飛騨川の下麻生網場まで運ばれました。そこで伐に組み上げられ、貯木場のあった名古屋の白鳥湊へと送られました。七宗山の良質な松材はしばしば、將軍家の息女の嫁ぎ先の住居（御守殿）の建材として使われました。

二 七宗山からの御神木伐り出し

明治時代、七宗山は帝室御料林となり、戦後には七宗国有林になりました。その間も良材を供給し続けました。

伊勢神宮の第五十九回式年遷宮（昭和二十八年）の際、七宗山より御神木が伐り出されました。昭和十六（一九四一）年八月二日、この山の老名木が式年遷宮に用いられる御神木として選ばれ、九月五日に木を祓い清める神事が行われました。そして木を伐採し、翌年五月に山を下ろして室兼の洞ヶ井戸土場で神事を行い、さらに運搬して上麻生小学校校庭で最後の神事を行った後、上麻生駅で貨車に積み込みました。御神木は鉄道で桑名駅まで運ばれました。このとき伐り出されたのは、樹齢四百数十年、胸の高さでの直径が五尺四寸（約一・六m）、枝下高（木の根元からその木の最も太くて長い枝までの長さ）が一丈二尺（約三・六m）の無節で直



昭和十六年の御神木伐り出し
＜出典：『年輪』第五号＞

幹の、見事に成長した老木であった。この御神木とともに、神殿造営用の扉材としての大木も献上されました。こちらのも厚さ四寸（約一〇cm）、幅四尺二寸（約一・三m）の扉用板が二枚とれる立派な大木でした。ちなみに、この第五十九回式年遷宮は当初、昭和二十四（一九四九）年に実施される予定でしたが、終戦直後の困難な情勢下で四年間延期されて実施されたものでした。

また、この式年遷宮以外にも様々な建築のための木材を七宗山から伐り出したことが地元の人々に記憶されています。昭和二（一九二七）年から同八（一九三三）年にかけて天理教の教会建設のために合計四、六五一石（約一、二九三m³）の松が七宗山から伐り出された記録が残っています。また太平洋戦争中、米軍の空襲で大半が焼失した東京の明治神宮が復興された際、七宗山の木材が使われました（昭和三〇年伐採開始）。明治時代、東京の両国橋の架け替えに七宗山の木材が使われたとも伝えられています。

大正時代までは以前と同じように、川の流れ



「木馬」で木材を運搬
＜出典：『目で見える七宗町の歴史』＞

を利用して木材が運搬されていましたが、その後「本馬」という横のような道具に木材を載せ、丸太を並べた「木馬道」の上を滑らせて運搬することが行われました。また七宗国有林の中心のひとつであった島小屋から室兼までは、昭和十（一九三五）年に森林鉄道が建設され、昭和三十五（一九六〇）年まで使われました。この林道の途中に岩山が両側からせり出す難所「空ふさがり」があり、現在は絶景スポットとして町外から見学者が来る場所になっています。森林鉄道廃止後はトラック輸送に変わりました。

三、森林資源と里山の暮らし

この地域の森林が人々にもたらしたものは、建築材だけではなくでした。農業だけでなく生活するには耕地が狭かったこの地域では、人々は農閑期に山仕事にも従事しました。昭和三十年代の燃料革命で石油・天然ガスがエネルギーの中心になるまでは、炭や薪（割り木）を生産し売り出していました。以下では薪炭以外で特徴的であった林産物を取り上げてみます。

大橋の付木

薪が燃料として使われていた頃、薪に着火する際に使われたのが、杉や桧の薄板の端に硫黄をつけた「付木」です。この辺りでは大橋で作られる付木が有名でした。住民の回想によれば、集落の約半数の家が農閑期の現金収入として付木を製造していました。秋の麦時が終ると、夏に伐採しておいた桧を山から運び出し日陰で保管します。それを鋸で五寸（約一五cm）位の長さに切り落とし、一寸五分（約四・五cm）の定規を当てて割斧で縦に小割りにしました。そして鉋を逆さにしたような台で木片を前に突き出して削り、薄板を七枚ずつ束で束ね、五〇束集めて大束にし、日当たりの良い場所で乾燥させました。次に硫黄に藍粉を混ぜて鍋で溶かし、その硫黄を束の先端に付けました。製品は美濃

町や関方面に荷車で出荷したり、仕入れに来る付木の行商人に売ったりしていました。

桧皮採取

伝統建築の屋根を葺くために使われる桧皮を採取する者が明治時代から神洲村にあり、特に奥田・八日市に多かったそうです。経験者の話によると現在、奥田では桧皮採取を生業とする人は残っていないそうですが、かつては地区で五、六人が桧皮採取に携わっており、「カリコ」と呼ばれる足場の付いた綱を使って、木を二〇、三〇mも登り、木製のヘラを使って表皮を剥いでいました。桧皮の注文は主に京都・岐阜にある「屋根屋」から受けました。また、八日市在住の別の職人が語った記録によりますと、彼は全国各地を回り、社寺の建築現場近くの山で桧皮採取に従事していました。

「神洲松茸」

かつて、この地域の山々にはアカマツが多く、秋になると松茸が生え、香りの良さから「神洲松茸」として知られていました。経験者からの聞き取りでは、数軒合わせて一日で数十kg取ったとか、一日で二枚敷いた筵に山積みされるほど取れたという話です。高山本線には「松茸列車」が運行され、東京や名古屋方面に出荷するために松茸が上麻生駅に集められ、構内にはその香りが充満していたそうです。列車の出発時間に合わせるため朝から急いで松茸を取り、駅

に運んでいました。その松茸も伊勢湾台風（昭和三十四年）の頃に境に生える量が減少し、今はほとんど生えなくなっていました。

四、里山の暮らしを今に伝える

地域の昔の暮らしの道具や技術を現代に伝えようと、里山文化伝承会（通称「ひちそう里山クラブ」）のメンバーが七宗町で現在、精力的に活動しています。会員は約十名で、民具の収集からメンテナンス、展示、技術伝承まで幅広く手掛けています。今までに収集した民具はおよそ千五百点となり、最近では年二回ほどのペースで展示を開催、神洲コミュニティセンターでも年四回、ショールームでの展示をしています。同会の前身は昭和五十九（一九八四）年に発足した「ふる里研究会」で、町に伝わる風俗や習慣などの保存・記録活動が行われてきました。平成三（一九九一）年には「民俗資料保存会」が結成され、民具の収集保存が行われるようになりました。

七宗町保存古民具特別展示「山で活躍した道具たち」と題した最新の展示では、山仕事に欠かせない鋸や斧、なた、炭俵編み機、炭俵、背板（背負子）などを解説パネルとともに紹介しています。見るだけでなく、道具の仕組みが分かる手製の模型を来場者に動かしてもらったり、実際に道具を持って重さを確認してもらったり、



桧皮採取の際、木に登るために使用した道具「カリコ」



駅に集荷された「神洲松茸」<出典：『七宗 村勢要覧』（昭和40年発行）>



炭俵と炭俵編み機<「山で活躍した道具たち」展示より>

たり、会員の想いと工夫が詰まった体験型の展示です。令和七（二〇二五）年十二月七日（翌）年二月二十日まで、七宗町中麻生の日本最古の石博物館にて開催されています。



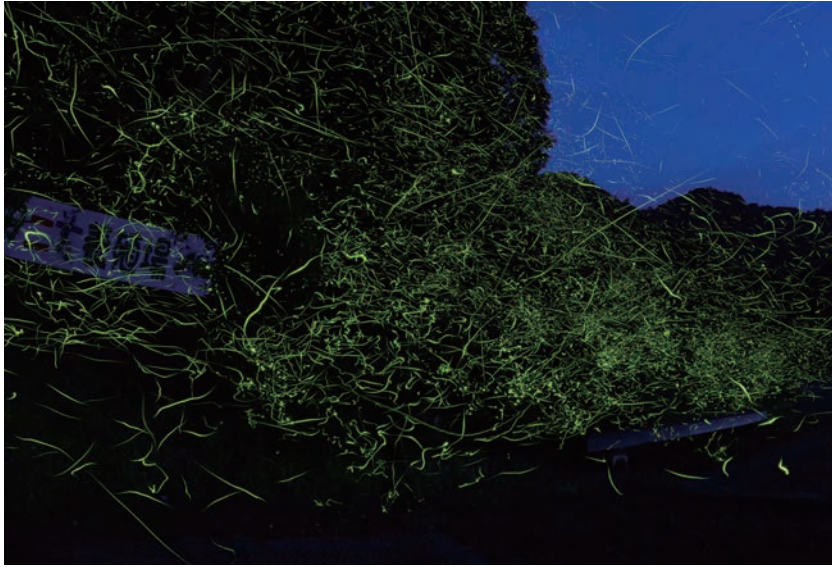
七宗町保存古民具特別展示「山で活躍した道具たち」の展示風景

同会は、小学生を対象にした体験学習にも力を入れ、「脱穀・精米体験」や「糸車体験」などを開催しています。脱穀・精米体験では、脱穀、唐箕での選別、木臼での粳摺りなど、昔の流れを忠実に再現。薪を使って火をおこし、釜で炊飯し、おむすびを作って食べる学習プログラムが子どもたちに好評で、今後も学校からの要望に応じて開催予定だそうです。

参考文献

- 『七宗町史 通史編』 七宗町 一九九三年
- 『目で見える七宗町の歴史』 七宗町 一九九四年
- 『七宗探訪』 七宗町教育委員会 一九九五年
- 『「しゃくなげ」 七宗町福寿会（一九八一年創刊当時は七宗町長寿会） 神洲村八十年史』 神洲村教育委員会 一九八五年
- 『白川町誌』 白川町 一九六八年
- 『七宗山御山守多々羅家と御山廻り役人』 神戸綱雄 『美文広報』 163号
- 『七宗山から伊勢神宮御造営の御神木の搬出』 『年輪』 第五号 七宗町長寿会 一九八五年
- 『七宗山』 長谷川真吾 一 『年輪』 第五号 七宗町長寿会 一九八五年
- 『我が部落の特産物』 長尾勲 『年輪』 第三号 七宗町長寿会 一九八三年
- 『檀皮師』 『古稀記念誌 七〇の綴方』 神洲一〇会 一九九二年
- 『松茸』 松山広行 『年輪』 第十一号 七宗町老人クラブ連合会 一九九一年

ホタル舞う神湊川流域と 明治四十三年の大洪水



七宗町葉津のホタル＜提供：七宗町＞

明治四十三年（一九一〇）年九月三日夕刻、七宗山の麓の村々を豪雨が襲い、神湊川流域では大洪水となりました。大きな被害を受けた当時の神湊村では死者が四〇名に上りました。一世紀以上も前の出来事のため、今、知りうる情報には限りがありますが、被災者の証言の記録から水害の様子を窺い知ることができます。また災害後、村人を励ますために作られた歌や活気を呼び戻すための劇場が建設された事実からは復興へと奮起する人々の気概が感じられます。



神湊川水系 ＜『七宗町史 通史編』の図を一部加工＞



万場から上中切にかけての河岸段丘



「さんまいすら（三枚修羅）」
＜出典：『年輪』第七号＞

一 はじめに

七宗町を流れる主要な河川は、飛騨川とその支流の神湊川です。神湊川は長さ約二二・八kmで、いくつもの支流を持ち、複雑な流路を示します。最後は飛騨川に合流します。神湊川水系の川の水は七宗町に降った雨のみが源になっており、神湊川は七宗町固有の河川だと言えます。

二 神湊川流域の地形・自然

神湊川流域にある、川の流れの作用でできた地形を見てみると、まず万場から上中切にかけて、神湊川より少し高い位置に、平成二十五（二〇一三）年より太陽光発電所「ソーラーパークひろそつ」が運転されている平坦な地形が広がっています。この場所は、かつて神湊川の水量が多かった時代に多量の土砂が堆積してきた「河岸段丘」です。

神湊川流域には川が大きく曲がって流れ、蛇行が多く見られます。室兼から上大橋にかけての神湊川や支流葛屋川の流れが、典型的な蛇行河川と言えるそうです。下大橋では小高い丘を囲むように南に膨らんで神湊川が流れています。かつて（約四万年前）は神湊川がこの丘の北側を流れており、その後には丘の南側を蛇行するようになったため、この箇所が川の侵食から取り残されました。

神湊川流域の東側の七宗山地域では「ゴルジュ」（フランス語で「喉」の意味）地形が見られます。この地域一帯が相対的に隆起して、急激に川によって下刻侵食されたため、狭くて急な崖が形成されました。

神湊川は水量が比較的豊かで、ネコギギ（国の天然記念物）やアシメドジョウのような、環境省レッドリストに掲載され絶滅が危惧されている魚が生息できる環境を残しています。

神湊川流域では夏になると、ホタルを見ることができます。神湊川、支流の間見川、葛屋川、葉津川のホタルが知られています。葉津ではホタルの幼虫の餌となる巻貝であるカワナナノ養殖場を地区の有志が作り環境整備した結果、ホタルの観賞スポットになりました。

林道が整備される以前、山で伐採した木材を川に流して運びましたが、川の中に岩が突き出ていると、狭くなっていたりすると木材が止まってしまうため、その場所に「修羅」を組みました。修羅は半月状の溝になるように丸太を並べたもので、その中に木材を滑らせました。神湊川の上麻生小学校から百m程上流のところに当たる「さんまいすら」と呼ばれる場所は、岩が多く、川が堰のようになっており、そこでは通常一枚設置する修羅を三枚組む必要がありました。そこから「さんまいすら（三枚修羅）」という地名が付いたそうです。

三 「明治四十三年の大洪水」

神測川は、多くの場所で平坦な土地を緩やかに流れ、河床は高くなっており、ひとたび大雨が降ると、支流の水を集め増水する特徴があります。そのために引き起こされた水害が「明治四十三年の大洪水」でした。

明治四十三年（一九一〇）年九月三日午後四時半頃から武儀郡東部を中心に雷雨となり、五時半前後から約三時間、七宗山周辺の武儀郡神測・上麻生・坂之東・中之保、益田郡金山・菅田・下原の各地で、二〇〇㎜を超える激しい雨が降りました。神測川は午後七時頃、瞬く間に増水、氾濫しました。当時の神測村では溺死者三六名、土砂に埋もれた者四名、家屋の流失四一軒、全壊一九軒と大きな被害を受け、その被害は寺洞の下市場と、下市場と接した大塚の一部に集中していました。家々が流された時はすでに暗闇の中で、隣家の異変すら気付かないほどで、下市場が激流に襲われて川原と化したことを村の人々が知ったのは翌朝だったそうです。

被災者の一人が昭和二十八（一九五三）年、神測小学校で行った講演を『神測村八十年史』が記録しています。当時三十四歳で、大塚に住んでいた福井朝太郎氏は洪水で母親をくしました。その日、午後一時頃から雨が降り出していました

が、「四時半か五時頃すばらしい雨が降り田の水が浮か



「明治四十三年の大洪水」の被災光景
＜出典：『目で見る七宗町の歴史』＞

り縁の下へ水が入りまし
た（「」内は講演録をそのまま引用。以下同様）。氏は怖が
る子供ら

を高い場所にある家に預け、身重な体の妻も逃げさせます。続いて母親を逃そうとした頃には「ぶつける様ないたい雨」になっていました。逃げる途中で倒れてしまった母親を家へ連れ戻し、二人で物を二階に上げていると家に「どんどん水が入り」二階に逃げますが、下は水で一杯になりました。

「大きい木が流れて来てドカンドカンと当り、みきみきと云う。家は弱つてモリモリと云う、いよいよ流されると思うと、おばあさんは気が変わり、「おれは出れないお前は大事な人だから出よ。」「早く早く出よ。」と云われたので、屋根に上り破風窓より出た。出て二・三步屋根の上を歩くともう屋根上まで水がついていた。そこで濁流に飛び込みますがうまく泳げず、諦めかけていると、稲穂が足に触れた気がしました。思い切って立ってみると立つことができました。真つ暗でしたが、どうも「天神様」の下の場所のようでした。「波は大きく一面が水ばかりで、大塚・大橋は大波原（ママ）であつた。ああ天神様やおつかさんのお陰で助かつたと思つた。大声を張り上げてみると、灯を持ってこつた다고叫ぶ声が聞こえたので、そちらに歩いてゆき、大塚の四名の者に助けられました。氏は翌日から母親を懸命に探し、二日かけて笠松まで探し回りましたが、見つかりませんでした。

講演の最後を福井朝太郎氏はこう締めくくっています。「下川原は両側全部流れてもとの薬屋一軒が残つた。それは大きい樹木が立つておりこたえていたらしい。川に入つて助かつたのは私一人です。」

七宗町長寿会発行『年輪』創刊号に掲載された亀山寿一氏の文章では、洪水時に小学四年生だった氏が、洪水の様子を書き留めています。「溺死者の遺体は、全部までは見付けられぬまま年も暮れよつとして龍門寺に於て合同葬が行われ、二名の同級生を失った四年生百名の代表として、山岡鷹助君が弔辞を読みながら万感胸に迫つてその場へ泣きくずれ、同級生らも声をあげて泣

き出し、担任の長尾石松先生が山岡を抱き上げて席へ戻られた」という切ないエピソードも残されています。

『神測村八十年史』には、当時村民の歌つた水害の歌「神測大洪水の歌」が載っています。この歌は住民の間で長く記憶されていました。

一、時は明治の四十三 九月三日のその夕

ふり続きたる大雨に 天をも浸す大洪水

二、山を崩し谷を埋め 我村里を川と化し

家居を破り命さへ 奪つても悲し四十人

三、道に背かぬ我村の 村人なごて幸薄き

むこに加うる天道の しもとの鞭はよもあらじ

四、さはさりながら世の中は 日にも晴あり

曇りあり

よく用ふれば禍も 変じて幸となるぞかし

〔中略〕

八、げに責きは人々の 心の底の覚悟のみ

心の底の覚悟のみ 友よ勉めんいざさらば
神測村の水害の様子は、現在の東洋大学の創立者で哲学者・教育家であつた井上円了（一八五八～一九一九）によつても書き残されています。彼は明治四十三年（一九一〇）年八月二十六日から十月十七日にかけて、岐阜県美濃地方を中心に講演旅行をしました。この時の紀行文の九月三日の項に「この日、武儀郡神測地方に未曾有の水災あり」と書かれています。そして井上は実際に九月二十四日、益田郡川西村から武儀郡金山町に入り、同じく水害の被害を受けていた同町役場を慰問した後、徒歩で神測村に入りました。「前後の駅路崩壊して車馬通じ難し。これ水害の中心点なり。この村外に七宗山あり。これより出ずる小流、暴溢して民家を洗い去り、人畜死傷多し」と記しています。彼自身が作った慰問の漢詩も残されています。

その夜、井上は神測小学校で「水害慰問演説」をします。校長の中島松太郎が講演会の幹事でした。龍門寺に宿泊し、翌朝には役場を訪問します。水害被災地を見て回り、「数十家全滅の跡



下市場橋の脇に立つ慰霊碑

に至れば、その悲慘、同僚の情に堪え難し」と、その印象を書き残しています。亀山寿一氏によれば「神測大洪水の歌」は、悲嘆に沈んだ村人の心を奮起させるべく、神測小学校の中島松太郎校長が作詞し、来村した井上円了が校閲したものだそうです。

洪水で川原になってしまった場所を復興するのに際して、劇場建設が良いのではないかと、明治四十五（一九一〇）年三月「神富座」が設立されました。五百人収容の劇場は、芝居・浄瑠璃・浪花節・映画等で賑わいました。

現在でも、神測川と葉津川の合流点付近の下市場橋のたもとに、「明治四十三年の大洪水」の死者を弔う慰霊碑が立っており、毎年、地区の人々によつて慰霊祭が続けられています。

参考文献

『七宗町史 通史編』 七宗町 一九九三年
『目で見る七宗町の歴史』 七宗町 一九九四年

「七宗探訪」

『しゃくなげ』 七宗町教育委員会
『守りたい加茂の豊かな自然』 美濃加茂市・坂祝町・富加町・川辺町・七宗町・八百津町・白川町・東白川村 二〇一九年「年輪」 七宗町福寿会

（一九八一年創刊当時は七宗町長寿会）
『神測村八十年史』 神測村教育委員会 一九五五年

「ほうき星は矢張り兎兆だった」 亀山寿一「年輪」創刊号 七宗町長寿会 一九八一年

「神富座の由来」 亀山雄一「年輪」第十七号 七宗町老人クラブ連合会 一九九七年

「美濃国東部紀行」井上円了選集『第13巻 東洋大学 一九九七年

大阪から開始した近代工法 第二編

淀川の粗朶沈床



淀川に設置された粗朶水制(ケレップ水制、手前)と遡行する蒸気船(枚方大橋より下流方向を望む。昭和14年)＜淀川河川事務所蔵＞

前編「オランダの土木技術書と流出土砂対策」で述べた通り、オランダ人技術者ドールンの明治政府への提言に従って、明治六(一八七三)年九月にエッシャーとデ・レイケが、同年十一月にチッセンが大阪築港計画のために招聘された。しかし彼らは築港計画よりも、まずは淀川上流域での砂防対策が先決であると結論した。淀川の舟運のためには蒸気船が大阪・伏見間を航行できるようにする低水路工事を提言した。

本編では、その低水路工事で導入され、全国各地で施工される嚆矢となった淀川の粗朶沈床工の設置経緯を述べた後、木曽三川での粗朶水制についても触れよう。

一 粗朶水制とは

「水制」とは、岸への水流の激突を防いだり、水流の方向を転じたり、また水深や流路幅を維持するために川中に設置するものである。

わが国で用いられてきた水制は、流水が通過する杭を用いた「杭出し水制(透過性)」と「刎ね・「水刎ね」・「刎出し」等と称された不透水水制である。木曽三川では不透水水制の「水刎ね」を、築造する材料(土、石、木)に拘わらず、堤防から斜め下流方向に延びている形状に因み、「猿尾」とも呼称している。明治時代にオランダ技術者がわが国に紹介し、設置されるようになった不透水水制の一種が、本編で取り上げる粗朶水制(ケレップ水制)である。

粗朶沈床の構造

粗朶とは、直径数cm程度の細い木の枝を束状にしたものである。

粗朶沈床は、粗朶を用いて次のような工程で設置される。

- ① 七年〜一〇年程成長した広葉樹のナラ、クリ、カシ等の長さ二尺〜四尺(三・六〜四・二m)の粗朶(灌木)を一定の太さ(直径七寸〜八寸(二二cm〜二四cm)の束(連朶)にする。
- ② 粗朶よりも粘性がある強靱な帯梢(柵粗朶とも言う)と連朶とで格子形の枠を組む(下格子と言う)。
- ③ その上に粗朶を三層に敷く。
- ④ 敷いた粗朶の上に同じ構造の格子形の枠(上格子と言う)を置いて、上下を結束する。
- ⑤ 小杭(粗朶、連朶、帯梢を固定する杭)などを用いて固定する。
- ⑥ 上部に石を積んで所定の位置に沈める。



岐阜県各務原浄化センターの敷地内にある前渡猿尾
長さは、寛永7(1630)年の国役普請で64間半(約117m)。明治4(1871)年の図からは、長さ182m、高さ4.4m。現在は286mである。



作成中の粗朶沈床
＜提供：信濃川下流河川事務所＞

位置に沈める。

粗朶沈床は、粗朶の柔軟性や屈曲性によって、沈床上部に設置した工作物の不等沈下を防止する効能があり、また、川底や川岸の洗掘に追従できる柔軟性を持っており、根固工(河床洗掘を防止する工法)等に用いられる。

一方、「粗朶水制(ケレップ水制)」とは、石積み(玉石又は割石を弧状に張る)した粗朶沈床を川岸から「低水路(通常の川の水が流れている流路)」が形成される水路幅までほぼ流れに直角に伸ばした水制である。この水制によって、洪水時に流下してきた土砂が川岸に接続した粗朶水制間に堆積し、この区間の河床が一段と高く(高水敷)になり、平常時の低水路が舟運に使用されるのである。

粗朶水制の設置形状は、流れにほぼ直角に設ける「幹部水制」(横刎、横工とも呼ぶ)と低水路の流れ方向に沿って設ける「頭部水制」(豎刎、縦工とも呼ぶ)の二種類がある。木曽三川では幹部水制だけである。

なお粗朶水制はケレップ水制とも呼ばれる。ケレップは、オランダ語の水制「スギ」の日本語読みで、「ケレップ水制」は同じ意味の語を重ねた重言(二重)表現である。

江戸時代の粗朶沈床

『日本水制工論』によれば、粗朶水制の原型と言える柴枝による護岸工法は、元王朝(一二七一〜一三八八年)の時代に欧州から中国へ伝わった

ようである。

江戸時代すでにわが国では、仙台藩（伊達藩）が寛政・享和年間（一七八九～一八〇四年）に、北上川筋下流で堤防から突き出した水制を設置する際、粗朶を筏状に組み、これを浮丸太で浮かべて所定の位置に導き、順次丸太を除きながら大石を投じて沈め、平水面上三、四尺（約一・二m）の高さの水制を築造した。しかし、この工法がわが国で考案されたのか、中国から伝わったのか、慶長十八（一六一三）年の仙台藩による遣欧使節団が伝えたのかは不明である。

二 わが国最初の粗朶水制工

淀川将基島での試験施工

明治六（一八七三）年にオランダから来日したエッシャー、チッセン、デ・レイケの三工師は、同年十二月に開始した宇治川から河口に至る淀川全川と支川での測量を翌七（一八七四）年十一月に一応終わらせ、引き続き淀川改修計画の立案に取り掛かった。

この改修計画は、京都の外港である伏見の観月橋から大阪天満橋までの約四〇・六km間に粗朶水制工（ケレップ水制）を三九三ヶ所施工して、河道内に平常時の流水が流れる低水路を形成する計画であった。つまり、粗朶水制を設置して、五〇〇～一、〇〇〇mの川幅内に幅二二〇m程の低水路を形成し、四〇m程度であった水深を一・五m程にして舟運を可能にし、堤防の危険箇所には防衛工事を施す計画であった。

淀川での粗朶水制工が、わが国で最初の施工であった。その効能を確認するため、水勢の激衝地点である淀川左岸将基島地先（天満橋上流三〇〇m網島町付近）を選び、明治七（一八七四）年十月下旬にチッセンとデ・レイケの指導で、三基の粗朶水制が試験施工された。これが、淀川修築工事の開始である。

『治水総論』に記されたケレップ水制

オランダの河川工学の知識や近代工法をわが国に紹介した本として前編で紹介した、明治六（一八七三）年二月初旬にドールンが大蔵省土木寮に提出した『治水総論』は、河川工学の基本概念である「流域や集水域」、「水面勾配」、「平均流速・流量」等について説明した後、具体的に「水刳ね（ケレップ水制）」の設置計画図を示し、その製作方法について、粗朶水制間の距離を「水刳ね」長さの凡そ一・五倍にすることを述べる。そして長さ約三〇mの粗朶水制一基を水深一・二m程の川に設置する際の概算費用をオランダの価格表で算出し、日本では木や石が安いのもっと安くなると結論する。最後に堤防の幅や高さ等について記している。

江戸川での低水路工事

淀川将基島での試験施工二年後の明治八（一八七五）年六月、リンドの計画による江戸川での試験施工（粗朶水制三基と護岸工一ヶ所）が、工手ヴェステルヴィルの指導で現松戸市古ヶ崎で行われた。この工事が利根川直轄工事の第一歩であった。

だが、資料はあまり残っていないようである。その後明治十（一八七七）年一月に、ドールンによる設置計画図に基づき、水制三基が設置された。内一基の設置位置は不明だが、水制二基と護岸工事が古ヶ崎地先から利根川直轄工事として開始された。

淀川のケレップ水制は一八七〇年代以降、河川改修工事でその多くが姿を消したが、ケレップ水制が土砂を堆積させて形成した「ワンド」と呼ばれる水域が残っており、大阪市旭区の城北公園付近の城北ワンド群等が知られている。一方、工事等で埋もれたケレップ水制が近年、考古学調査によって発見された例もある。

淀川修築工事

明治七（一八七四）年十二月、淀川改修計画が土木寮に提出され、翌年五月に決裁となった。工事は翌六月からエッシャー、デ・レイケ両工師の指導のもと着手された。明治九（一八七六）年末にエッシャー、チッセンは東京に移り、淀川の改修と水源の砂防など一切の工事はデ・レイケの手にゆだねられた。粗朶工によるケレップ水制や護岸工を中心に、工事は順次全区域に進められたが、工事が進捗するにつれ、計画通り水深一・五mの航路ができあがった。明治一〇（一八八八）年度に、当初計画の工事のうち守口以西の下流を残して一段落した。

平成二十四（二〇二二）年十月、京都府埋蔵文化財調査研究センターは、このケレップ水制は、明治八（一八七五）年から開始した淀川修築工事に伴う水制であると発表した。

蒸気船の運行

小型蒸気船は明治三（一八七〇）年に建造されたよう、明治五（一八七二）年には淀川で二隻の外輪式小型蒸気船が運行した。ちなみに利根川の外輪式蒸気船は明治四（一八七二）年に就航している。

淀川修築工事の成果が上がってきた明治十年代、粗朶水制（ケレップ水制）の設置で蛇行した低水路が形成されるにつれ、河底勾配の低下



ドールンによる松戸の江戸川での「水刳ね」試験低水路設置図（『治水総論』より。一部加筆）
＜出典：土木学会附属土木図書館デジタルアーカイブス＞



淀川での粗朶水制工の作業状況（昭和32年、十三大橋付近）
＜淀川河川事務所所蔵＞



木津川・桂川合流部の水制護岸の設計図＜「木津川河床遺跡第22次発掘調査報告」の図を加工＞



積荷船を曳いている淀川の外輪蒸気船（昭和14年撮影）
＜淀川河川事務所所蔵＞

に伴って流水速度が緩くなり、蒸気船が次々と就航した。明治二十（一八八七）年には、蒸気船は三隻を数えた。明治九（一八七六）年に大阪と京都を結ぶ鉄道が開通していたにも拘わらず、淀川舟運は黄金時代を迎えていた。

しかし明治四十三（一九一〇）年、淀川左岸に京阪電鉄が開通すると旅客輸送は鉄道に移った。一方で貨物輸送である蒸気船による曳船は、大正を経て昭和三十年代半ばまでその役割を長らえた。曳船は、近世以来淀川の貨客輸送を担っていた和船を、蒸気船が曳くものであった。

オランダ技術に対する批判と普及

淀川に設置された粗朶工の結果が良好であったため、その評判は全国に知れわたり、粗朶工指導のため淀川から熟練者が派遣された。また粗朶工修得のため各地から淀川に実習に来る者が絶えなかった。一方でこの工法に対する批判も一時期見られた。

『日本水制工論』は粗朶沈床工について、「盛んに欧米の文物に心酔し、為に本邦古来の優秀なる工法も、全く顧みられずして、只々新奇を銜ひたりしが如し。」「水流の緩急を究めずして、広く各地の大河に之を応用し、〔中略〕優良なる工法なりしに拘はらず、往々失敗に陥り」と記している。

上記の好例として天竜川の事例を挙げる。明治二十（一八八七）年に長野県の日竜川と千曲川の二ヶ所で試験施工が行われたが、下川路村（現飯田市大字川路）の天竜川河岸に設置したケレップ水制が流失した。

『川路村水防史』は試験施工の結果について、「緩流急流の河相の辨へも、選択もなく、凡て外国式を最上と盲信して施工した粗朶工は真実に適当でなかつた」と述べている。

このように適用外の急流河川にまで粗朶水制を設置したため、一時期、オランダ技術に対する批判も生じたが、粗朶水制は緩勾配の砂利河川の水制工法として広く普及した。

最後に、粗朶水制（ケレップ水制）の木曾三川への設置について見てみよう。

三、木曾三川のケレップ水制

木曾三川治水対策の要望

木曾三川の抜本的な治水対策の要望は明治元年に始まっている。明治元（一八六八）年十二月に笠松県知事長谷部惣連は、河口部の開削や木曾三川分流等を政府に建言し、明治四（一八七一年）には、名古屋藩大参事の丹羽賢は「外国人を使つて従来と一変した体制で治水事に当たれ」と政府に要望している。

明治七（一八七四）年に淀川で初めて施工されたケレップ水制の効能は、治水工事を望む各地の注目を集めた。明治十（一八七七）年十月、三重県令岩村定高と愛知県令安場保和は連名で、オランダ技術者による木曾三川の調査を内務省に要請した。

明治十一（一八七八）年二月〜三月、デ・レイケは木曾三川の調査に着手した。デ・レイケは分派・合流で網目状の三川の流れを、独立した個別の流れに分流すると共に、淀川と同様に、木曾・長良・揖斐川に粗朶水制によって「低水路」を設置する計画を立てた。

粗朶水制の設置開始

淀川の河道改修と上流域からの土砂流出に取組んでいたデ・レイケは、明治十一（一八七八）年には九頭竜川河口の三國港突堤（通称エッセル堤）工事と木曾三川での粗朶水制設置に関わった。まさに「席の暖まる暇もない」仕事の連続であった。

同十一（一八七八）年四月に木曾三川流域の現地調査書「木曾川下流概説書」を内務省に提出したデ・レイケは、帰国する設計者エッシャーに替わって翌五月に工事着工した三國港突堤工事を引き継いでいる。さらに同六月、デ・レイケは九頭竜川河口部の土砂堆積防止のため、粗朶水制

を設置している。なお三國港突堤工事は一応明治十三（一八八〇）年十二月に完了した。

デ・レイケは木曾川改修工事の計画書の作成を明治十七（一八八四）年に命じられるのであるが、前述の木曾三川の調査を開始した明治十一（一八七八）年二月には早くも、内務省土木寮（明治七年

に大蔵省から移管）の指示で、ケレップ水制の設置準備が行われている。

土木局出張所に準備されたケレップ水制の材料は、現羽島市正木町三ツ柳（濃尾大橋右岸下流）から現海津町成戸（改修工事で長良川右岸に変更）までの木曾川両岸用に用いる粗朶二〇万束、帯梢七千束、杭木一万本であった。

同年四月半ば成戸村で粗朶七万四千束を用いて、ケレップ水制工事が着工された。残りの粗朶（二万六千束）等は正木町三ツ柳から成戸上流までの間に施工したようである。以後、粗朶沈床は木曾・長良・揖斐三川の各地で施工された。

表1は、木曾三川各地の村で開始した明治十一（一八七八）年十二月〜明治十五（一八八二）年までの粗朶沈床工事の着工又は竣工年である。

木曾三川に最終的に設置された水制数は表2である。この調査区間は、馬飼大橋下流一km〜東名阪木曾川橋までの一五km区間である。

同表によると、三川に設置された水制本数は、明治十九（一八八六）年の明治改修計画

表1 木曾三川の各地で行われた粗朶沈床工事
＜『岐阜県治水史』下巻の記述より＞

着工・竣工年	揖斐川筋	長良川筋	木曾川筋
明治11年12月（着工）	安八郡皇岐村・平村 右津郡東駒野村・外新田・安田村 大野郡杉野村		海西郡成戸村
明治13年2月（竣工）	安八郡福東村		羽栗郡笠松村・田代村
明治15年3月（竣工）	安八郡南波村・福東村	安八郡森部村（3月着工、12月竣工）	中島郡八神村
同年4月（竣工）		厚見郡額島村（9月竣工）	



木曾川右岸のケレップ水制

表2 明治改修による施工水制数
＜『KISSO』vol. 98掲載の表を再構成＞

	木曾川	長良川	揖斐川	合計
明治19年の改修計画 平面図からの計測数	130	108	159	397
大正2年の三川改修 竣工図からの計測数	127	100	175	402
未施工数(A)	20	25	4	49
計画外施工数(B)	17	17	20	54
(A-B)	3	8	-16	

川では未施工数（四ヶ所）に比べて計画外施工数（二ヶ所）が多く、水制本数が改修計画時以降に新たに増えたことを示している。

現在、木曾川左岸の水制は、平成初期に行われた高水敷工事（フランケット工法）で多く埋没したが、今なお残る木曾川右岸側の水制群は、豊かな河川空間を創出しており、水生生物や植生、さらに小動物等の良好な環境となっている。

平面図からは合計三九七基、大正二（一九一三）年の木曾長良揖斐三川改修竣工図からは四〇二基であり、木曾三川全体では四九基は何らかの原因で施工されず、五四基は計画外の箇所に施工された。

木曾川と長良川の未施工数と計画外の施工数は余りかけ離れていない。ところが、揖斐

参考文献

- 『デ・レイケとその業績』建設省中部地方建設局木曾川下流工事事務所 一九八七年
- 「上林好之博士収集資料概要書」木曾川文庫 二〇〇九年
- 『明治以後本邦土木と外人』社団法人土木学会 一九四二年
- 『日本水制工論』真田秀吉 岩波書店 一九三二年
- 『淀川百年史』建設省近畿地方建設局 一九七四年
- 『利根川百年史』建設省関東地方建設局 一九八七年
- 『岐阜県治水史』下巻 岐阜県 一九五三年
- 『川路村水防史』代田豊太郎・牧内武司編 川路村水害予防組合 一九三六年
- 『木津川河床遺跡第22次発掘調査報告』
- 『京都府遺跡調査報告集 第155冊』公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 二〇一三年
- 「わが国における近代の河川舟運（一）利根川、淀川を中心に」松浦茂樹『水利科学』No.226 一九九五年

尾張平野の川と戦国のまち

京都大学大学院人間・環境学研究科

教授 山村亜希



河道の一部が池状に残る天王川公園（筆者撮影）

江戸時代以前、尾張平野（濃尾平野の木曾川よりも東側）には木曾川の分派川がいくつも流下していました。これらの分派川は勾配の緩い土地を蛇行して流れ、頻繁に氾濫して肥沃な土壌をもたらすとともに、自然堤防と呼ばれる微高地を形成しました。このような場所を地形区分で「自然堤防帯」と呼びます。

戦国時代の尾張平野の自然堤防帯では、守護・戦国大名が拠点を置く城郭のもとで城下町が発達し、また川湊を中心として港町ができました。ここでは、そうした港町の一つである津島を取り上げ、河川や自然堤防と、その町並みの形成・発展との関係を見てみます。尾張の戦国都市としての津島の立地と私たちは、城下町の清須とも共通していました。

1. 尾張平野の地形と河川

濃尾平野は、木曾三川（木曾川・長良川・揖斐川）が形成する日本有数の規模の沖積平野である。濃尾平野のうち、かつての尾張と美濃の国境をなしている木曾川よりも東側の現愛知県側を、尾張平野と呼ぶ（図1）。濃尾平野の西側を南北に走る養老断層が沈降するため、木曾川の河口部は平野の西側に偏り、主に木曾川の土砂堆積によって形成される尾張平野も全体として西に傾く「東高西低」の地形である。現在

木曾川は、江戸時代初期に尾張藩による御囲堤によって固定された流路であり、それ以前には、犬山・下流付近で現木曾川流路から分派した五条川、青木川、三宅川、日光川などが木曾川の分流であった。つまり、江戸時代初期に御囲堤で分流の上流が完全に締め切られるまでは、尾張平野の中に複数の木曾川の分派川が流下していたことになる。戦国時代の尾張平野は、現在よりも多くの河川がいたる所に流れる風景であったことを想定できる。

木曾川の土砂堆積は犬山付近から下流で始まり、犬山から一宮・小牧・岩倉付近までに扇状地、一宮などから津島・清須付近までに自然堤防帯、それよりも下流に三角州（デルタ）といった異なる傾斜と地質の地形を形成する。この地形区分の中でも、尾張平野で最も広い面積を占めるのが自然堤防帯である。自然堤防帯は、5kmで2m前後低くなる程度の緩い勾配で、木曾川の分流は各所で蛇行するのが特徴である。そのため、頻繁な氾濫によって肥沃な土壌が堆積するとともに、河川の周囲に多くの自然堤防と

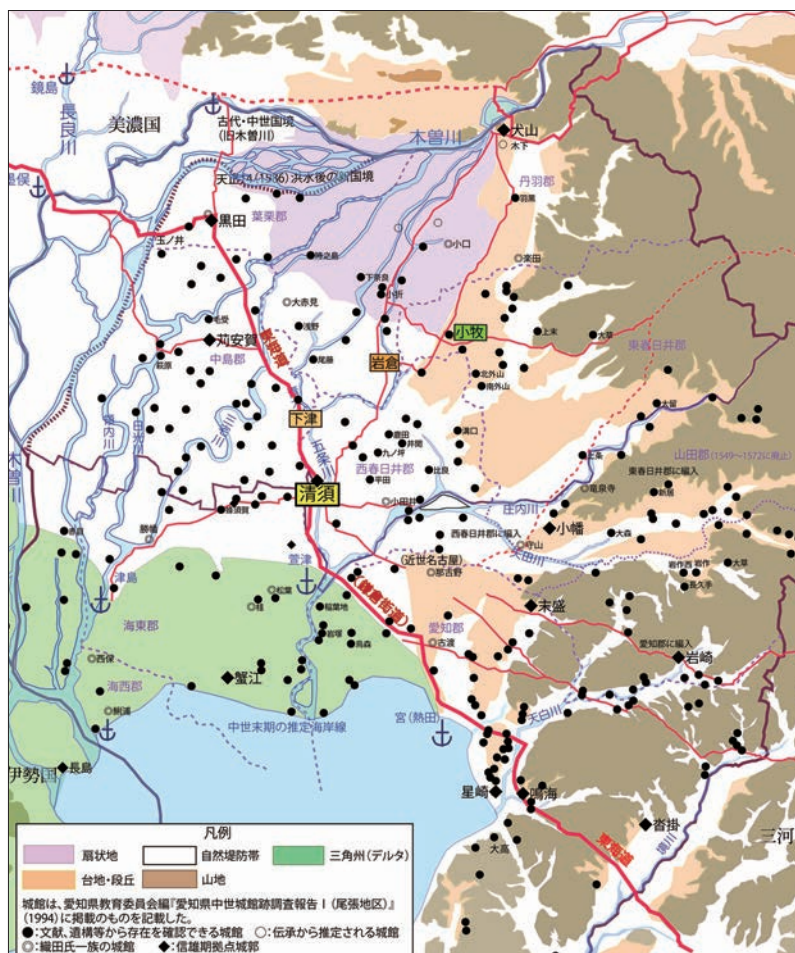


図1 戦国・織豊期尾張の河川・地形環境と城郭・港（筆者作成）

呼ばれる微高地が形成される。尾張の守護・戦国大名が拠点を置いた城郭としては、下津・岩倉、清須、勝幡、大山、小牧などが挙げられるが、これらの多くは自然堤防に立地する。それ以外の武士や村の有力者の城館も、尾張平野の中で特に自然堤防に多い。明治期の市や町のつく地名の分布をみても、やはり自然堤防に多い。これは、自然堤防の肥沃な土壌と多くの微高地が、古くから農業生産力の高さと村落の形成に結びつくとともに、勾配の緩さと河川の多さゆえに隅々まで舟運が盛んで余剰生産物の売買や物や人の移動を可能にしたことから、自然堤防が戦国尾張の中心地域であったことを意味する。それに加えて、自然堤防を北西から南東に横断するように、戦国時代までの東海道が通過し、そこから分岐する複数の街道も存在していた。自然堤防における村落や城館、市・町の集中は、河川と街道を介した物流と人の交流を促し、下津・岩倉・清須・勝幡の城の周囲には城下町が発達した。さらに、河川と街道の交通機能によって、津島や萱津などには川湊を中心とする港町が作られた。このように、戦国尾張の主要都市は、尾張平野の河川

と強い関係を持ち、河川を作る自然環境を基盤として建設された点に特徴がある。それでは、具体的にどのような河川環境で、いかなる戦国都市が作られたのだろうか。自然堤防における尾張の主要な中世港町であった津島を例に挙げて、この問いに接近する。

二、天王川と港町・津島

津島は、三宅川と日光川が合流した天王川に面した中世の港町である（図2）。三宅川、日光川はもちろん、天王川も、戦国期には現在見える以上に広がったと考えられる。津島からは三宅川にも日光川にも遡上でき、尾張平野の玄関口となる立地であった。また、自然堤防の中でも最も下流で三宅川との接点に位置し、河口も近いことから伊勢湾からの遡上も容易であり、海と川との交点でもあった。三宅川を遡上した場所には、信長を生んだ織田氏の一族が居城とした勝幡があり、津島は勝幡系織田氏の経済基盤ともなった外港でもあった。なお、津島と並んで中世尾張の港町として有名な萱津も、五条川と庄内川の合流点の下流で、自然堤防と三宅川との接点に位置している。

低湿地の中の自然堤防の高まりが、かつては「島」と呼ばれたことは、天王川の東側の集落が津島、その対岸の津島神社の立地する場所が向島という地名であることからもうかがえる。実際、現状でも上街道に沿った津島の旧集落の背後は、天王川から遠ざかっているにも関わらず標高は低く、0m以下の後背湿地となっている。

津島の町屋群から成る町並み（写真1）は天王川の東側に広がる一方で、津島神社（写真2）とその社家町は天王川の西側にまとまっている。つまり、津島では天王川を挟んで都市と神社が対峙している。それでは、天王川東側の町並みは、戦国期を含む中世にどのような形で形成されてきたのだろうか。これを解く鍵は、津島の町を構成する米之座、堤下、筏場、今市場、中島の五つの地域コミュニティにある。

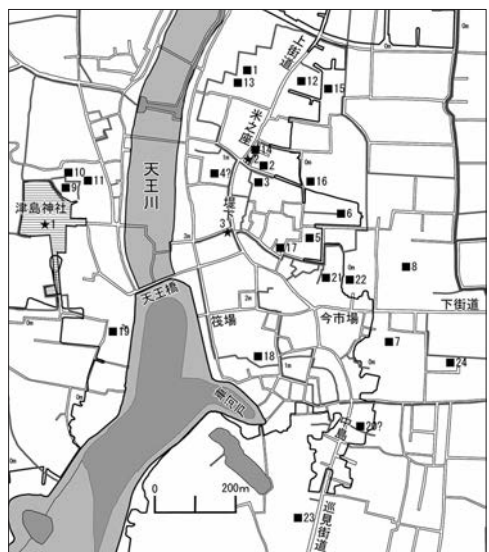


図3 14・15世紀の津島における寺社の分布
★は神社、■は寺院を示す。★・■の数字は、本稿末尾の参考文献表に挙げた山村垂希「中世津島の景観とその変遷」を参考のこと。筆者作成。



写真1 上街道沿いの津島の町並み（筆者撮影）



写真2 津島神社（筆者撮影）

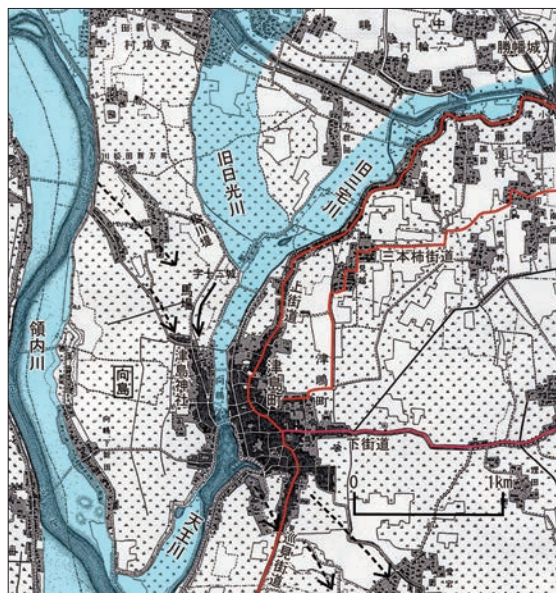


図2 津島の周辺環境
明治24年測図1: 20000地形図に着色・加筆して筆者作成。

五条川を遡上した場所が守護・戦国大名の本拠となった清須であった。津島と萱津に共通するこのような立地条件が、中世港町の成立には好都合であったことがうかがえる。

天王川の東側を併走する上街道は、中世東海道から分岐する街道であるが、天王川の堤防としても機能していた。上街道に沿って南北に緩くカーブしつつ津島の集落が立地していたが、これは天王川の緩く曲がる流路に平行する自然堤防の微高地に街道と集落が形成されたことを示す。このような

十四・十五世紀の南北朝期・室町期に存在した寺社の分布を地図化する（図3）と、上街道と下街道の交差点よりも北側に多いことが分かる。それらの寺社の中には、上街道に直接、境内が面するものもあり、街道沿いの町並みの形成以前から存在したことがうかがえる。そのうちのひとつである一三八一年創建の市神社（図3・★2、写真3）は米之座に立地するが、神社名と地名からそこで米市が開催され、中世の同業者集団である米座が存在したことを推定させる。その近くには、戦国時代に織田信長の父の信秀が連歌を行った正覚院（不動院、図3・■14）があるが、これも上街道に面していることから、戦国時代よりもっと古くから存在し

たのだろう。南北朝期の元号である「明德」の紀年銘のある墓石が残る大龍寺（図3・■1）も米之座の北端にある。このように戦国時代よりも古くから存在した寺社のあり方をみまると、天王川の船着き場も米之座が堤下にあったのだろう。津島神社の遷移所が堤下の金燈籠社（図3・★3）であり、参道であるはずの天王橋よりも北側にあることは、本来の天王川の渡河点が古くからの集落の中心に近い北側の堤下にあったことを示唆している。

次に十六・十七世紀の戦国期・近世初期に存在した寺社の分布を地図化する（図4）と、一転して南部に寺社が急激に増加したことが分かる。南部の筏場、今市場、中島の辺りは、もと

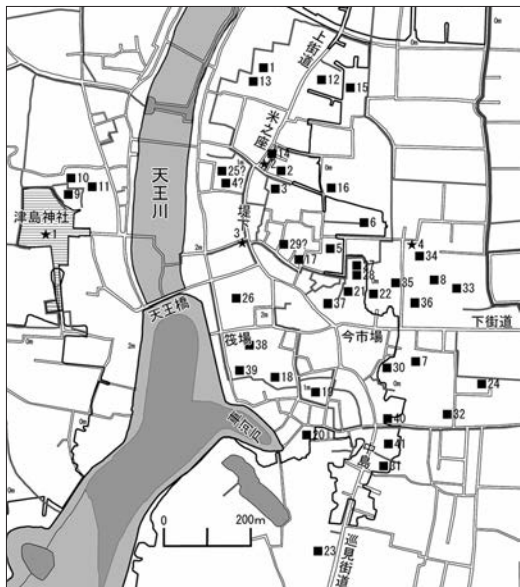


図4 16・17世紀の津島における寺社の分布
★は神社、■は寺院を示す。★・■の数字は、本稿末尾の参考文献表に挙げた山村亜希「中世津島の景観とその変遷」を参考のこと。筆者作成。



写真3 上街道に面する米之座の神社 (筆者撮影)
屈曲が目立つ不規則な街路網となり、直線や方形が特徴的な人為的な街路・街区のかたちが全くと言って

もとは旧河道や後背湿地が広がる低湿地であり、自然堤防の安定した微高地の上に立地する北側の米之座や堤下よりも居住条件が悪い地形であった。このような河川環境を逆手に取り、戦国期には旧河道を活かして、天王川から分岐する入江状の川湊(車河戸)が整備された。その周囲の低湿地の開発も進み、寺社とともに有力商人の屋敷も次々に建設された。このような車河戸の大規模な新港建設と周辺の都市化は、勝幡城の織田氏の支配によるものではなく、津島の経済活動の活性化によって成長した有力商人が自主的に行ったインフラ整備事業の可能性が高い。その証拠に、全体として微地形に対応した曲線や屈曲が目立つ不規則な街路網となり、直線や方形が特徴的な人為的な街路・街区のかたちが全くと言って

ていほど見られない。戦国期に津島の川湊が南の車河戸に変更されたのは、新興商人の勃興とともに、天王川の土砂堆積が徐々に上流から進行するという河川環境の変化も理由であろう。戦国期になって都市の中心が南側にシフトすると、それまでの津島神社への渡河点に代わって、より南側に新たな参道である天王橋が架橋された。こうして、津島には古くから存在した米之座・堤下に、戦国期に新たに成立した筏場・今市場・中島を加えた五つの地域コミュニティが形成され、港町津島の五カ村と呼ばれるようになった。港町津島において京都などに見られるような都市共同体が成立したことを示している。その伝統は現在でも五カ村が山車(まきわら船)を出す天王祭に伝わっている。

中世の港町津島は、自然堤防の複雑な微高地を巧妙に利用しつつ、変化しやすい河川環境に恵まれて、フレキシブルに町並みと都市の重心を変化させた点で、自然環境に調和的で流動的な都市であった。戦国期の港町の経済発展は、それまで十分に利用されていなかった低湿地の都市化を促し、そこに大規模な新港と不規則ながら高密度な街路網と街区を形成した。その一方で、神社を中心とする宗教空間と港町による都市空間が河川を挟んで対峙する独特の構図は、変更されることはなかった。

三、河川環境と都市空間

このような河川と自然堤防に規定された流動的な戦国都市のあり方は、当時の尾張の「首都」であった清須(写真4)とも共通する。室町・戦国期の政治中心である守護所は、五条川沿いの下津、岩倉、清須に次々

に移転した。いずれも五条川の形成した大きな自然堤防と複数の旧河道が特徴の地形環境である点や、都市の頻繁な移動は津島に通じる。戦国期の清須城下町には、五条川の東側の安定した自然堤防に清須城と武家屋敷群、武士に付随する職人の市場や川湊があり、対岸の西側に中世東海道が通ると同時に、神社門前の河原市があったと推定される。河川を挟んで武家の政治空間と町の経済空間が対峙する構図も、津島とよく似ている。

清須城は信長が小牧に居城を移した後も、尾張の中心城郭であり続け、江戸時代初期の一六〇年に名古屋に城が移されるまで、尾張の筆頭都市であり続けた。その最終形態は、五条川を挟んで両側に戦国期以来の武家地や町を基盤とする都市空間が広がり、一部で旧河道を利用した巨大な堀で城下町全体を囲い込むものであった。河川を挟んで両側に同等の都市空間が展開する城下町は、日本の数多ある城下町の中でも特異であろう。このように近世初期の清須城下町が斬新な形態となったのは、河道と自然堤防に規定され、異なる性格の空間を河川越しに対峙させる尾張の戦国都市の特徴が、最後まで払拭されず、残り続けたためと考えられる。

その結果、清須城下町は最終形に至っても、直線・方形の街路・街区は部分的にしか導入されず、江戸時代の統一的で整然とした城下町プランからは遠いものとなった。尾張で近世城下町らしい都市計画が施工されるためには、戦国期までの中心地域であった尾張平野の伝統的なオールドタウンから脱却し、全く異なる地形の台地・段丘を選んでニュータウンを建設するしかなかった。そこで選ばれたのが、一六〇年に清須からの町人や寺社の大移動(清須越)によって、熱田台地の上に建設された名古屋城下町であった。

以上のように、戦国期から江戸時代初期にかけての都市の移り変わりは、尾張の河川環境と都市空間の関係を大きく変化させるもので

■参考文献

『愛知県史 別編 自然』 二〇一〇年

『図説 名古屋圏』名古屋大都市圏研究会編 古今書院 一九八八年(第2版)

「中世津島の景観とその変遷」 山村亜希 『愛知県立大学文学部論集 日本文化学科 編』53 二〇〇五年

「信長と尾張の城下町―小牧城下町成立前後の尾張の都市―」 鈴木正貴 『信長の城下町』 仁木宏・松尾信裕編 高志書院 二〇〇八年

「城下町の空間的多様性の理解に向けて―尾張犬山を事例として―」 山村亜希 『ふびと』71 二〇二〇年

あった。現代都市・名古屋は、このとき尾張の伝統から脱却して選ばれた台地上の城下町の延長上にある。安定した高台の上に明快な基盤割の方形街区が施工された名古屋城下町は、それ以前の不安定な河川環境に規定されながらも、流動的で柔軟な対応を駆使した尾張らしい町づくりとは一線を画す、徳川政権による永続的な巨大都市の創出であった。現代において都市空間は、名古屋城下町のように、不安定で脆弱な自然環境を克服し、合理的で機能的な人工物として建設されるものかもしれない。一方で、自然環境と共生しながら流動的に存立した尾張平野の戦国都市には、人間社会と都市の関係性の常識を根本から問い直す面白さがある。



写真4 復元された清須城と五条川 (筆者撮影)

赤池と大蛇（七宗町上麻生）

七宗町の飛水峡ロックガーデン展望台付近から約500m上流の河原に、「赤池」という池があります。そばには「細尾谷」と呼ばれる谷川が飛騨川に流れ込んでいます。昔、この谷川の上流に大蛇が住んでおり、その通り道は木の根の皮が剥ぎ取られるほどで、人々は恐れて近づきませんでした。この話を聞いた猟師の井戸五兵衛。大蛇を退治すべく探しに出かけました。



探し回って歩き疲れた五兵衛が大きな倒木に腰掛け一服していると、体がかすかに動いたように感じました。不思議に思ってた座っていた木を凝視すると、枯れ木と違っていたものが大蛇の胴体だったのです。五兵衛は仰天したもののすぐに冷静になり、狙いを定めて鉄砲を発射。大蛇の頭を撃ち抜いたかと思うと、大蛇は山鳴りがするほどの叫び声をあげ、谷川の流れに飛び込みました。

その後、七日七夜、谷が赤く染まり、谷川の出口に溜まった血は池となりました。それが「赤池」の由来だとか。

一方、血で染まった谷の光景の凄まじさに無我夢中で逃げ帰った五兵衛。その晩から高熱に苦しみ、息絶えてしまいました。

現在、赤池には赤池龍神と赤池辨財天が祀られ、毎年五月に「赤池辨財天龍神祭」が盛大に開かれます。子供たちが山車を引いて地区を練り歩き、七宗町の春を彩ります。

参考文献 『七宗町史 通史編』 七宗町 一九九三年

『広報ひちそう』 七宗町役場

ふね 船ちゃんのおぼれ話 第二十八話

「土木技術者の大地への思い」

時は幕末、のちに「長州ファイブ」と呼ばれる5人の青年が海を渡りました。海外渡航は禁じられ、その企てにより吉田松陰が投獄された、そんな頃です。この長州ファイブの面々は、近代日本の基礎を築くことになるのですが、その一人が井上勝です。

彼はロンドン大学で5年間、鉄道・鉱山などの近代土木を学びます。学業はもちろん、学費のためのアルバイト、暇を見つけては現場に赴き技術を学ぶ様子は、教授を感心させるばかりだったそうです。明治元（1868）年の帰国後は、政府の鉄道部門トップを長年務め、鉄道網の整備に生涯をささげたことより、現在「鉄道の父」と呼ばれています。

そんな井上は、明治21（1888）年の鉄道工事（現在のJR東北本線）の視察の際に、岩手山の裾野に広がる荒野を目にし「これまで鉄道敷設の事業に携わり、文明開化のためとはいえ多くの美田良圃（美しい田や良い畑）を潰してきた。このような荒蕪地（荒地）が、しかも官有で手をつけられることなく放置されているのならば、開墾し農牧の用に供しその埋合せをしたい。それは国家公共のためで、自分にふさわしい事業ではないか」というような思いを抱いたと伝えられています。この構想は、日本鉄道副社長の小野義真（「よしざね」とも）の計らいと、三菱の2代目総帥・岩崎彌助の出資により動き出し、小野・岩崎・井上の頭文字をとって「小岩井農場」と命名されました。ちなみに小野は、明治7（1874）年まで土木官僚として、オランダ人技師のデ・レイケやエッシャーらと共に、近代的な大阪港の整備や淀川改修に携わりました。

明治24（1891）年、農場は井上を場主としてスタートしますが、大地は痩せ「岩手嵐」と呼ばれる強い風が吹く過酷な環境でした。そのため初期の経営は厳しく、牧場経営に精通していた宮内省の人物に相談し、岩崎家に再建計画を提案する形で、井上は経営からは退きますが、晩年まで何度も農場を訪れその成長を見守り続けました。

現在の農場は、緑豊かな大地に成長し、岩手県有数の観光地となり、「小岩井」の名を冠した乳製品は全国で広く販売されています。そして、船頭平蘭門と同じ頃に造られた「天然冷蔵庫」（写真1）という施設もあります。バター等の貯蔵庫として、小山を掘った中に煉瓦で造った施設で、一年を通して10℃程に保たれているそうです。冷蔵庫を含めた21の施設（第一号サイロ（写真2）など）が、重要文化財に指定され、場内で大切に保存されています。

幕末に近代土木を学んだ「土木技術者の大地への思い」がきっかけとなり、多くの人々によって育まれた農場を、ぜひ『列車』で訪ねてみてはいかがでしょうか。



写真1 天然冷蔵庫（明治38年建造）
＜写真提供：公益財団法人 小岩井農場財団＞



写真2 第一号サイロ（明治40年建造）
サイロは、牧草などを発酵させるための施設。煉瓦造・日本の現存最古のサイロ。
＜写真提供：同上＞

表紙写真 『雪景色の飛水峡』 ＜提供：七宗町＞

飛水峡は七宗町から白川町にかけて約12km続く峡谷です。両岸に飛騨川の激流によりできた罅穴群があり、国の天然記念物に指定されています。6月頃、岩ツツジが淡い紅色の花を咲かせます。飛騨川流域・木曽川中流域に広がる飛騨木曽川国定公園の見所の一つです。

『KISSO』 Vol. 137 令和8年1月発行

編集 木曽三川歴史文化資料編集検討会（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

発行 国土交通省中部地方整備局木曽川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>



『KISSO』
ホームページは
こちらから

編集後記

『KISSO』は、創刊号からのすべての号が、木曽川下流河川事務所のホームページよりダウンロードできます。
『KISSO』ホームページ URL <https://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/KISSO/index.html>